

活動報告 3. 赤村お弁当販売における学生ニーズに関する調査報告

幸田莉子(公共社会学科2年)

私は毎朝、福岡県立大学内で販売されている赤村のお弁当販売員として、昨年の後期から関わってきました。関わるなかで、学生のお弁当の利用実態と、お弁当に対する学生のニーズを把握することが、今後、学生の要望に対応した、お弁当の提供に繋がるのではないかと考え、調査を行ってみたいと思うようになりました。調査をやってみてほしい思いを、社会貢献ボランティア支援センターのスタッフに相談したところ、社会貢献論演習担当教員につないでいただき、アンケート調査を実際にやることを認めていただきました。

一方、アンケート調査を始めたころに、プレ・インターンシップ活動先として、赤村特産物センターに是非行ってみたいと思うようになりました。赤村特産物センター内で県大で販売しているお弁当が出来るまでの工程や、センター内の様子を知りたいと思ったからです。プレ・インターンシップ先として、大学に交渉していただき、活動先として赤村特産物センターが受け入れてくださることになりました。

そして、活動中に、学生ニーズの調査結果の報告をさせていただく時間を設けていただき、昨年の夏季休暇中は赤村特産物センターでプレ・インターンシップを体験させていただきました。

本日は、その調査結果を中心に報告させていただきますと思います。

まず、対象及び方法を紹介します。調査期間は平成24年7月25日から30日までの約1週間としました。福岡県立大学の1年から4年までの協力が得られた学生540名を対象にアンケート調査を実施しました。調査方法は、講義開始前にアンケート用紙を配布し、講義終了後に回収しました。回収率は100%でした。

調査項目は、学年、学科、性別、県大での赤村お弁当販売コーナーの利用頻度、よく購入す

る商品、お弁当販売に関する要望としました。

調査対象者の学年の内訳をスライドに示しました。1,2年生が各々約40%を占めていました。3年生が15.9%、4年生も5.6%を占めていました。次に性別についてみると、回答の8割が女子学生だということが分かりました。学科の分布を見てみると図のような結果になりました。公共社会学科、社会福祉学科、人間形成学科が各々約20%を占め、看護学科が32%でした。

次に利用状況について紹介します。まず、1週間あたりの利用頻度についてみると、利用している人は約10%に限られていました。この結果から、赤村特産物センターのお弁当販売に対する学生の認知度が低いことが明らかとなりました。

その理由として、私は赤村のお弁当販売を通して、販売時間が朝の8時過ぎから1限目が始まって少し経った9時半過ぎまでの時間に限定されているからだと考えました。朝は1限の授業があっても開始ぎりぎりに来る学生が殆どであるということと、2限目から授業が始まる学生がいるからではないかと考えました。また、購入している学生は、お弁当販売のことを知っていて、さらにお弁当の美味しさを知っているリピーターであることも考えられます。

さて、アンケートの片隅に、利用していない理由として「赤村のお弁当販売がどこで、何時ごろから販売しているのか、どのような商品を販売しているのかを知らない」と記述してくれた学生も若干名いました。

よく利用する曜日については、利用したことがあると回答した45人の学生を対象として集計しました。利用している曜日のなかで、最も高頻度だったのは水曜日でした。この結果は水曜日の時間割と関係していると思われます。水曜日の1限目の授業は販売場所のすぐ横の大講義室で行われています。このことにより学生が

利用する教室の近くで販売することにより、購入する学生が増えることが予想されます。

よく購入する商品について回答率が高かった順にグラフに示しました。この結果についても利用したことがあると回答した45人の学生を対象として集計しました。最も購入している頻度が高かった商品がパン類で、次いで150円弁当、200円弁当、250円弁当でした。コンニャクや漬物といったその場で食べるには難しい商品は、学生はあまり購入しないことが明らかとなりました。

次に赤村お弁当販売に対する要望をまとめたものをスライドで示しました。この結果はアンケートに回答した全学生540名を対象に集計を行いました。要望として最も多かったのが、販売時間の延長で26.1%を占めていました。お弁当のおかずの種類を増加、パンを毎日販売する、販売場所を増加、果物や野菜サラダの販売については約10%の学生から要望がありました。またその他の回答で多かった要望は、お昼の時間帯に販売をして欲しいとのことでした。

今回の調査結果をもとに、今後の改善に向けた提案事項についてまとめると次のようになりました。

まず1つ目の改善案として、販売時間を増やすことです。例えば、朝の部と昼の部に分けて販売することで、より多くの学生に赤村のお弁当を食べてもらうことができると思います。

2つ目としては、販売場所を増やすことです。開講される講義に合わせて販売場所を柔軟に考えることが望まれます。

3つ目は150円弁当の中身を充実させることです。150円弁当が朝ご飯としては適度な量であり、中身の質を上げることで、朝ご飯用にお弁当を購入する学生が増えると考えています。

4つ目は、1つ目の要望が可能になった場合の話ですが、お昼に販売するお弁当のおかずの種類が増加と充実化です。以前友人から言われたことですが、味は美味いけれどおかずの種類が限られているので、飽きてしまうとのことでした。多くの野菜を扱っている赤村特産物センターだと思うので、野菜を利用したおかずのバリエーションを増やして欲しいです。

このように要望としては4つの改善案をあげさせていただきますでしたが、私たち学生スタッフ

としては、赤村のお弁当販売をもっと学生の認知度を上げるために、写真入りのポスターやチラシを作成し、学内でのPR活動を行いたいと考えています。

赤村特産物センターでの調査報告をした際の職員の方のコメントとして、センターの会長である中原さんは「最近はお弁当を作ってお客様に提供していることだけで満足していて、改善したり要望に応えたりすることを行っていなかった。学生の生の声を聴けてよかったです。きっと他の職員も改めて気付かせてもらえた感謝している、ありがとう。」と声をかけていただきました。私が一人で進めてきたことに正直感謝の言葉をいただけるとは思っていませんでしたので、とても驚きました。そして他の職員の方の一人が「大学では多くの方がお弁当を買ってくれていると思っていたから、お弁当の中身は同じでも大丈夫だろうと思っていた。実際は赤村のお弁当を好きだという人が毎回買ってくれていたのだね。出来るだけ学生の要望に応えていけるように努力したい。」とおっしゃってました。その言葉は、私自身も言ってくさなければ知り得ないことでした。需要する側と供給する側の声をお互い伝えることの大切さを改めて知りました。そして私自身報告できたことを嬉しく思いました。

今回、大学の学生対象に調査をするにあたって、多くの方から手助けをしてもらいました。アンケート用紙の配布は、赤村のお弁当販売に関わっていた、他の学年学科の学生にも手伝ってもらいました。調査の質問内容や報告の仕方、データ化する方法などは、大学の先生方に丁寧に指導して頂きました。そこで感じたのが、協力してもらった方々に対する感謝の気持ちと、卒論の調査で学生対象にアンケートをとる先輩方の大変さです。膨大なデータを集めてデータ化していく作業はとてつらく、忍耐力が必要でした。しかし今、この時点で経験していることが、のちの卒業論文の作成時に繋がるのではないかと考え、調査してよかったと感じました。

赤村特産物センターで体験したこと、事前に行った学生ニーズに関する調査をしたことは、私にとって自分自身を大きく成長させました。普段は大学内で学ぶことが殆どですが、長期休暇だからこそできる貴重な体験をさせていただ

いたと思っています。今回の体験で、職員の方々と親しくなることができ、地域の方と交流を持つという点で、私の休暇がより充実したものとなりました。最も強く感じたことは、働く女性はいくつになっても素敵に輝いているということです。実際、働き出して夫婦間の在り方に変化がみえたそうです。妻が働くことによって夫が作業に協力的になり、家事もしてくれるようになったそうです。赤村に加工所ができたことで、そこで働く方々に活力を与えたことに感動しました。

将来、私はどのような職業について、どのような働きぶりなのかはまだ想像できませんが、働きながら輝きを放つような素敵な女性を目指し、これからの学生生活をより良いものにしたと考えました。

ご清聴ありがとうございました。

福岡県立大学の赤村お弁当販売における学生ニーズに関する調査報告

福岡県立大学人間社会学部
公共社会学科2年 幸田莉子

1

対象及び方法

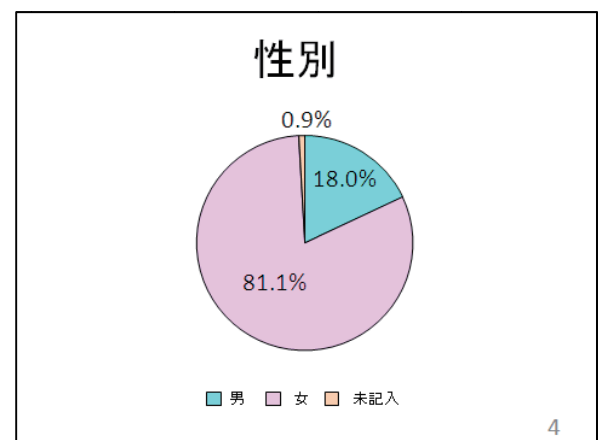
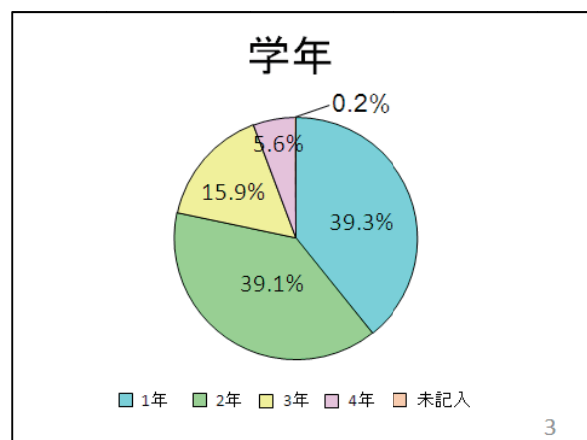
調査期間: 平成24年7月25日～7月30日

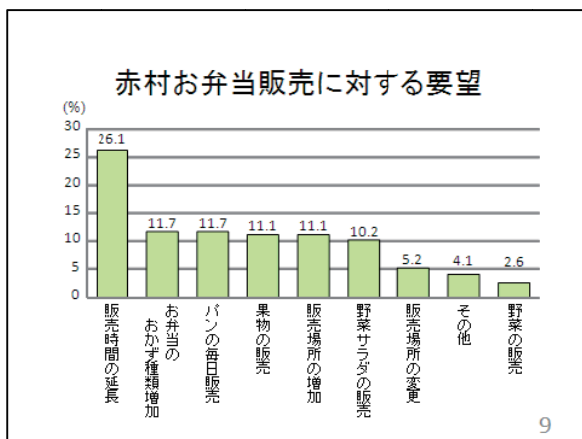
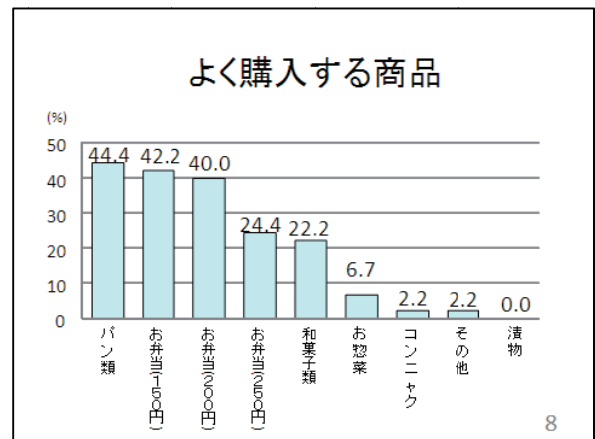
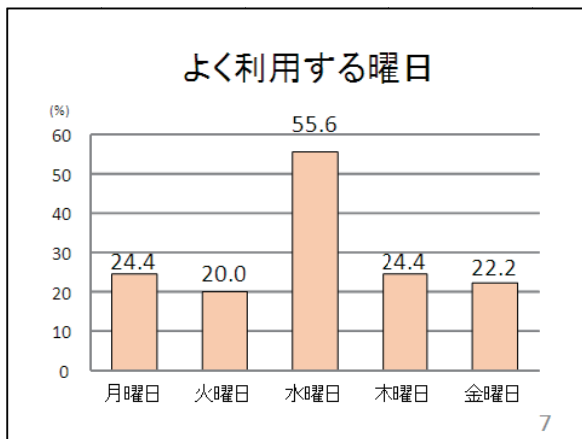
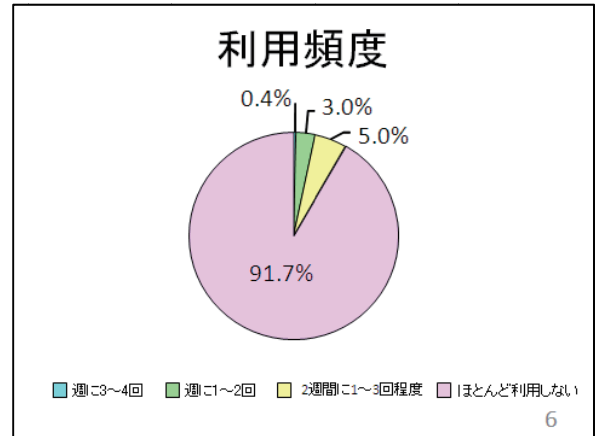
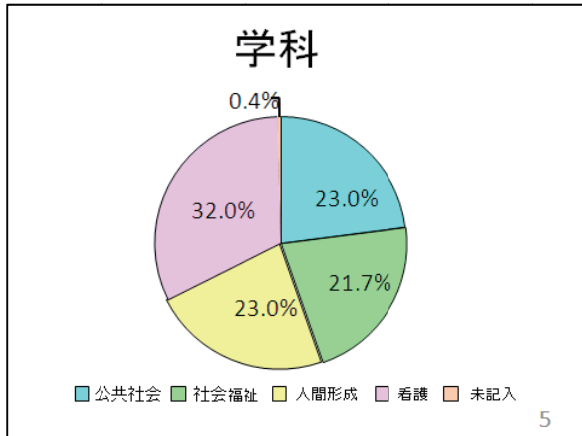
調査対象: 福岡県立大学1年～4年 合計540名
回収率100%

調査方法: 講義開始前配布、終了後回収

調査項目: 属性(学年・性別・学科)
質問(利用頻度・よく購入する商品・お弁当販売に関する要望)

2





提案事項

- ★販売時間を増やす。
例) 朝の部(朝8時~9時)と 昼の部(昼11時半~12時半)にわたっての販売
- ★販売場所を増やす。
例) 時間帯別に沿い、曜日によって販売場所を変える。
- ★朝の販売で150円弁当の充実化
例) たんぱく質を取り入れる。卵・鶏肉など。
- ★昼に販売する場合...
おかずの種類増加、充実化
例) 漬物の種類を変える。サバの味噌煮を200円弁当にも...

10

活動報告 4. 東日本大震災ボランティア活動報告

「青春 18 きっぷで被災地へ」

本田志帆(人間形成学科3年)、齋藤美咲(人間形成学科3年)

こんにちは。人間形成学科3年の本田志帆と齋藤美咲です。今日は、昨年夏に行った宮城県南三陸町での震災ボランティアについてお話をさせていただきますと思います。

しかし、皆さんそろそろ眠くなってくる頃かと思しますので、まずは私たちの紹介から始めていきたいと思えます。

私たちは昨年3月、20歳記念として日本縦断をしました。このように、南は鹿児島枕崎、北は北海道稚内までをJRの青春18きっぷを使って、2週間、電車で旅しました。

青春18きっぷとは、日本全国のJRの普通列車に乗り放題の切符です。1枚で1日有効で、5回分がセットで11,500円とお得です。心が青春していれば、年齢は関係なく使えるそうです。乗り降り自由で、使い次第で格安に旅行することができます。

鈍行電車での旅では、いろいろな方との出逢いがあります。このとき私たちが出逢った方々をちょっと紹介したいと思います。

まずは、旅で初めて出逢った方。広島駅で声をかけてくれたおじさんです。「日本縦断しています」と話すと、ジュースをおごってくるとともに、「男は経済力」というありがたいお言葉もいただきました。

次は、名古屋での出逢いです。若い男性3人に行く手を阻まれ、声をかけられました。まさにこのイラストのような感じですね。が、私たちのこのフル装備を見て、彼らは去って行きました。このように、旅の途中、様々な出逢いがあります。

福島駅では、私たちを変える大きな出逢いがありました。

ホームで電車を待っているとき、80代くらいのおばあちゃんに「どこから来たの?」と声をかけられました。私たちが「福岡です」と答え

たのをきっかけに、話が弾み、一緒に電車に乗りました。いろいろなお話をしたのですが、会話の途中、ぽつりとおばあちゃんがこう言われました。「福島に来るのは怖くなかった?」

九州にいる私たちは、東日本大震災をどこか遠いもの感じていましたが、おばあちゃんの一言で「被災地の苦しみは終わっていない」と気付かされました。おばあちゃんとはこのあとも話が弾み、別れ際には「可愛い孫に出逢えてよかったわ」と、くしゃくしゃに折った5千円札を握らせてくれました。名前も連絡先も教えてくれませんでした。

実は、これ以前に私たちは、北九州市立大学が行った、東日本大震災関連プロジェクトの報告会に参加したことがありました。北九州市立大学は、地域の菓子会社に呼びかけ、被災地の小学校にお菓子を届けたり、自衛隊の協力を得て、現地でのボランティア活動を行ったりしました。震災ボランティアに対する熱意と行動力を見て、同じ大学生かと驚かされました。それと同時に、私たちには、私たちに合った支援の方法があると考えていました。

そんな矢先、福島でこのおばあちゃんに出逢い、おばあちゃんのこの一言に動かされ、私たちは被災地にボランティアに行くことを決めました。

そして、夏。

私たちは再びリュックを背負い、東北へ向けて出発しました。「時間はあるけどお金はない」そんな私たちは、もちろんこのときも青春18きっぷでの旅を選びました。

旅の期間は、8月11日から19日の9日間です。そのうちの2日間を被災地のボランティア活動にあてました。

活動内容によって様々ですが、被災地ボランティアに必要なものを紹介します。

帽子、飲食物、動きやすい服装、軍手、ゴム手袋、長靴です。私たちが作業したのは、真夏の昼間だったので、水分補給が第一です。3 リットルの水を一日で飲み干しました。瓦礫撤去の作業は、危険なものが多くあるので、軍手とゴム手袋を重ねて使います。土の中にとがった物が埋まっていることもあるので、厚底の長靴が適しているそうです。

作業前のミーティングでは、「作業中に津波がきたら、自分の命は自分で守る」ことを言われました。そして少し先の高台に避難することを指示されました。このとき、「被災地に来たんだ」という実感が湧くとともに、いつ地震が起き、津波がくるか分からないという恐怖を感じました。また、このときボランティアスタッフの緊張が高まったように思いました。

これがボランティアスタッフの着用するビブスです。このビブスを着用して作業しているときは、写真を撮らないように言われました。なので、作業中の写真はありません。

私たちが行った活動は、もともと畑だった場所の瓦礫の撤去作業です。真夏の日差しでカラカラに乾いた畑を男性陣が掘り起し、女性陣が選別作業をしました。瓦礫の中から出てきたのは、おもちゃや食器、歯ブラシ、延長コード、靴、化粧品などの生活用品でした。そこで生活が営まれていたことを思うと、胸が苦しくなりました。近くには仮設住宅があり、小学校低学年くらいの子どもたちが走り回る姿が見えました。あんなに小さな子どもも震災を経験したのかと思うと、胸が締め付けられる思いでした。

これは、第十八共徳丸です。共徳丸は、気仙沼湾で活躍していた巻き網漁船です。全長 60メートル 330 トンの巨体が津波によって港から 800m 入った場所まで流されてきました。現在、この共徳丸は今ある場所での保存か解体かを検討されています。

これは気仙沼の昇り竜です。気仙沼市の岩井崎で竜の形をした松の木が復興のシンボルとして注目されています。松は高さ約 2 メートルで、東日本大震災の津波で枝のほとんどが流されましたが、わずかに残った枝と曲がりくねった幹の形がまるで空に向かう昇り竜のようだとわれています。

この建物は、4 階建てですが、3 階までの窓ガ

ラスは全て割れていて、津波がこの高さまで来たことが分かります。

これは、気仙沼のホテルの屋上から撮った写真です。暗くて見えづらいのですが、建物が流され、基礎がむき出しになっていることが分かります。

これは、気仙沼の復興屋台村です。気仙沼市では、全体の約 7 割の飲食店が津波で流されました。復興屋台村は、被災して営業できなくなった飲食店や物販施設が入居する飲食店街です。飲食産業が破滅的な被害を受けるなか、今後は地域外からも客を呼び込み、飲食店の復興を目指しています。復興屋台村の中にあるお店に、ミサンガが売られていました。これは、被災者の方が作ったもので、ミサンガとともに、その方の体験談が書かれた紙が入れられています。このミサンガの収益の約 95%はミサンガを作った方の元へ行くそうです。一言に支援と言っても、様々な形があり、私たちが出来ることはたくさんあるのだと思いました。

実際に被災地に行ってみて、震災が日本で起こったことなのだとやっと理解したように思います。それと同時に復興にはまだまだ多くの時間と人手が必要だと感じました。私たちがまた被災地へボランティア活動に行きたいと考えています。

私たちが見たことや感じたことを多くの人に知ってもらおうと、現在、伊田商店街の Ritorovo CoCoITA で写真展を開催しています。今月 31 日まで行っているのでぜひお越しください。

それでは最後に、よくある質問コーナー！ 私たちの旅の話を聞いて、いろいろな質問をされますが、その中から今日は、よく聞かれる質問をピックアップして、お答えしたいと思います。

それでは 1 つ目。JR が止まったらどうするの？ どうしましょうか？ 齋藤さん。私たちも一度だけ経験したことがありますね、本田さん。さあ、そのとき私たちはどうしたのでしょうか。ヒッチハイクをしよう。東北へ向けて出発をした 2 時間後、私たちは電車から降ろされました。前日の大雨で電車が止まってしまったのです。再び動き出す目処がたっていないくて、ピンチ、いや、チャンスだと思いました。気がつくとき私

たちは、短い親指をスッと伸ばし、ヒッチハイクを始めていたのです。原付に乗ったおじさんに満面の笑顔で「乗ってく〜？」と声をかけられましたが、乗れません。そうですね。

さて、次の質問にいきましょう。いやらしい話、いくらかかるの？そうですね、皆さんお金の面が一番気になりますよね。私たちも旅の資金を得るため、2人で宝くじを買ったこともありましたがね。10万円弱ですね。一泊2,000円くらいのゲストハウスなどに泊まりながら、出来るだけお金をかけずに旅しています。食費はケチりません。喧嘩の元ですからね。

次の質問にいきましょう。

旅の間、洗濯はしているの？これは気になりますよね。なんせ9日間も旅をするわけですからね。していますよ。コインランドリーや洗濯機付きの宿に泊まったときに洗っています。だから毎日清潔なので安心してください。

さて続いての質問は、2人でいて喧嘩しないの？これ、一番聞かれますよね。私たちの仲を裂きたいのでしょうか？仲が悪そうに見えるのでしょうか？でも、喧嘩はしません。

こんな私たちですが、まだまだ女子大生ライフを謳歌していきたいと思います。若いというだけで、ちやほやされることも多いですからね。お金がなくても、工夫次第で楽しい旅をすることができます。

大学生である今しかできないことがたくさんあると思います。皆さんも興味があることに挑戦してみてください。私たちも、残りわずかの女子大生ライフを謳歌していきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



青春18きっぷ
とは



3

男は経済力。
Men is economic strength.



4



5

福島駅でのおばあちゃんとの出会い

おばあちゃん
「どこから来たの？」

本田と齋藤
「福岡です！」



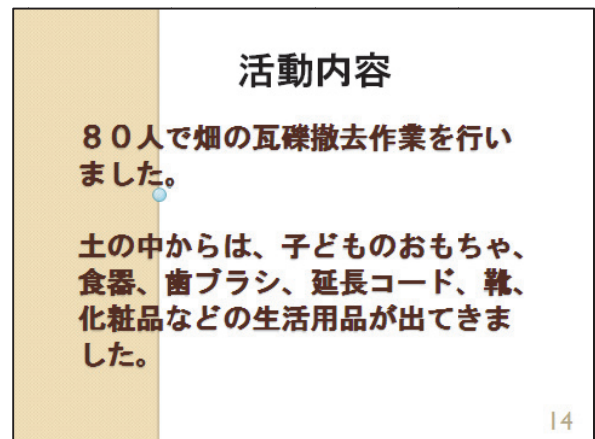
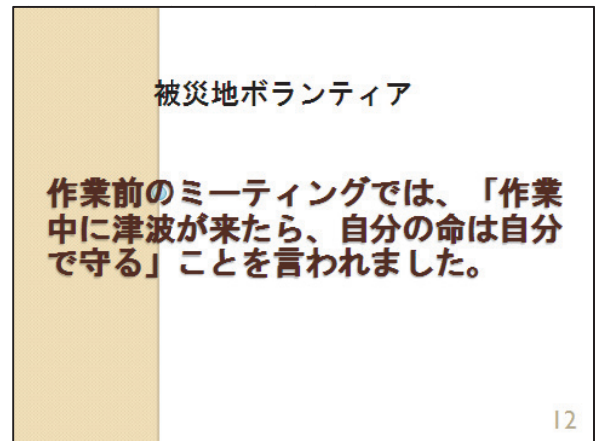
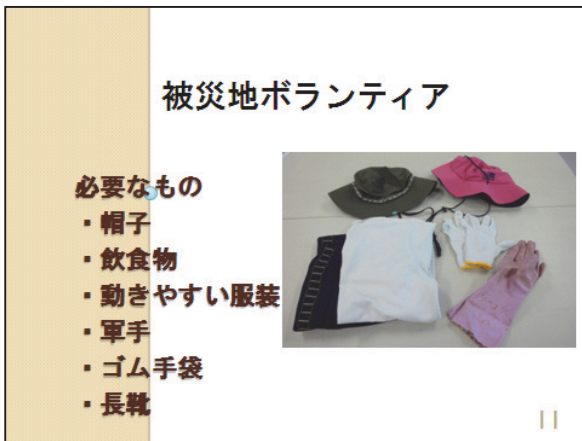
6

福島に来るのは怖くなかった？

7

九州にいる私達は、東日本大震災を
どこか遠いもの感じていましたが、
おばあちゃんのこの一言をきっかけに
「被災地の苦しみは終わっていない」
と気付かされました。

8



第十八共徳丸



15

昇り竜



16

気仙沼市内の様子



17

気仙沼市内の様子



18

復興屋台村



19

活動を終えて

実際に被災地に行ってみて、やっと震災が日本で起こったことなんだと理解したように思います。それと同時に、被災地の復興には、まだまだ多くの時間と人手が必要だと感じました。私たちも、また被災地へボランティア活動に行きたいと考えています。

20

私たちのその後

私たちが見たことや感じたことを、多くの人に知ってもらおうと、現在、Ritrovo CoCo ITAで写真展を開催しています。今月31日まで行っているのので、ぜひお越しください！



21

よくある質問



22

Q. JRが止まったら
どうするの？

23

A. ヒッチハイクをしよう！



24

Q. いやらしい話、いくらかかるの？

25

A. 10万円弱ですね。



26

Q. 旅の途中、洗濯してるの？

27

A. してますよ(怒)



※でもまれに乾かないこともあります

28

Q. 2人でいてケンカしない？

29

A. しません(照)



30

こんな私たちですが、まだまだ
女子大生ライフを謳歌してい
きたいと思います！！

31

大学生である今しかできないことが、た
くさんあると思います。みなさんも、興
味があることに挑戦してみてください。

ご清聴ありがとうございました！！

32

活動報告 5. ボランティアサークル活動報告

(1) けんけつっち

発表者 善生あやめ(公共社会学科2年)

近藤大輝(社会福祉学科3年)

活動分野：献血推進

部員数：20名



献血推進サークル「けんけつっち」は、若年層を中心とした献血離れをなくし、より多くの方に献血のことを知っていただき、「安全な血液の安定した供給」を目的として活動しています。

北九州学生献血推進連盟という団体に所属し、日本赤十字の北九州血液センター、北九州を中心とする6大学が加盟して他大学と協力して北九州を中心に活動しています。主な活動内容は、年に2回行われる街頭献血と、県立大学内での献血の企画・運営です。イベントの宣伝活動はもちろん、協賛・事前準備・当日の運営など献血センターの職員の監修のもと、学生主体で協力し合って活動しています。また毎月1回、各大学の代表者が集まり、定例会を行っています。各大学と協力し合う活動のなかで、たくさんの人との出会いにも恵まれ、切磋琢磨することができています。

手術や血液製剤を作るために必要な血液は、すべて献血によって賄われています。現在の技術では、血液を人工的に作ることは出来ません。その上、血液には有効期間が定まっており、長く持つものでもありません。若年層の献血離れも進み、血液は慢性的に不足している状態が続いています。「一人でも多くの献血者を増やすことで、輸血が必要な方にいつでも血液が届くように」と若年層への献血の啓発、健康増進(採血不可者)の周知、骨髄バンクの紹介もしています。

5月には、献血の啓発と、ご協力いただいている皆様への感謝の意を込めて、「献血の輪をつなげよう」のスローガンのもと、博多どんたくに参加しました。手書きのメッセージを書いたしゃもじを持ち、けんけつっちちゃん体操を踊りながら、博多の街を歩きました。また、福岡ブロ

ックと北九州ブロックの合同合宿を行いました。今回は私たち福岡県立大学が所属する北九州ブロックが主催し、今後の活動方針や呼び込み練習、各ブロックの活動内容報告等を行いました。

7月には、今年の1回目の学内献血を行いました。受付・採血者数は昨年より増加しており、学内の皆さんに、積極的に献血協力の勧奨をした成果を残すことが出来ました。

8月はサマーキャンペーンという、街中での献血活動を行いました。サマーキャンペーンでは子ども連れの方にも献血に来ていただけるよう、かき氷を食べたり、折り紙を折ったりなどできるキッズコーナーを設けるようにしています。

12月には、サマーキャンペーンと並んで1年間で大きなイベントであるクリスマスキャンペーン行いました。今回は2日間の日程で実施し、2日間で受付者数248人、採血者数187人という成果を上げることが出来ました。

私たち自身、いつ事故や病気になるかわかりません。決して他人ごとではないのです。健康で、献血の条件を満たしている方はぜひ献血で愛の輪を広げてください。

今後ともよろしくお願ひします。

部員名

伊計 柁哉(部長)、善生あやめ(副部長)、近藤大輝、中田友佳里、小竹智子、宮路貴志、本田志帆、伊藤公彦、堤 美久、柴田優佳、黒岩美帆、池崎泰庸、稲田ゆうこ、石出ちさと、西 淳也、森岡咲希、丸山佳子、伊藤みゆき、北川ちあき、佐々木夕羽

献血推進サークル「けんけつっち」



1

ここでクイズ！！

Q. 体の中を流れている血液の量は、どれくらいでしょうか？

考えてみてっち★



2

正解

A. 大人の人で、
4000ml～5000mlの血液が流れています。

(男性は体重の約8%、
女性は体重の約7%が血液です。)

3

「けんけつっち」について

若年層の献血離れによる血液不足



わたしたちにできることを
やろうと発足



4

けんけつっちメンバー

• 1年生	11 人	
• 2年生	6 人	
• 3年生	3 人	
• 4年生	2 人	計 22 人

5

北九州学生献血推進連盟

6大学が加盟

(九州工業大学・九州女子大学・西南女学院大学・西工日本工業大学・九州国際大学・福岡県立大学)

若年層に献血の大切さを広めよう！

6

主な活動

- ・6大学が集まって行う月に1度の定例会
- ・各大学での学内献血
- ・街頭献血(夏季・冬季)

7

年間の活動内容(24～25年度)

8

5月 博多どんたく

～福北学生献血どんたく隊～



9

5月 福北合同合宿

～意見交換会にて～



10

7月 学内献血



受付 98 名
採血 70 名

8月 サマーキャンペーン開催

受付 160 名
採血 129 名

11

12月 クリスマスキャンペーン

12月23日(日)
12月24日(月)
両日で、

受付 248 名
採血 187 名



12

12月 クリスマスキャンペーン



13

1月 学内献血

受付 **71名**
採血 **40名**



みなさん
寒い中、ご協力頂き
ありがとうございました！

14

おわりに

15

LOVE in
ACTION !



16

活動報告 5. ボランティアサークル活動報告

(2) つくしんぼ

発表者 浜田悠乃(人間形成学科2年)

続木奈美(人間形成学科2年)

活動分野：障がい児の余暇支援活動

部員数：30名

活動日：ミーティング 毎週木曜日 18:30～

会場：3203 教室



つくしんぼは、保護者や子どもたちが、安心して楽しい活動ができるよう、学生自ら企画・準備を行い楽しんでもらえる会(例会)をつくり交流をすることを目的としているサークルです。

このつくしんぼサークルは、もともと、田川市の社会福祉協議会と障がいを持つ子どもの保護者の方々でつくった余暇支援を行う団体でした。そこに、学生のボランティアが集まり、次第に今のように学生が主体となって活動を行うようになりました。今では30年以上も続いている歴史のあるサークルです。

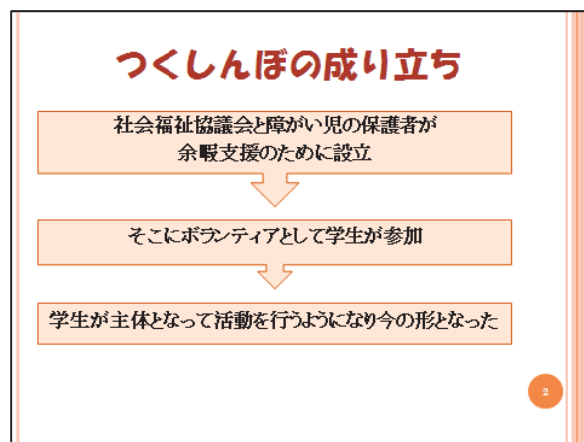
活動内容：主に知的障がいを持つ子どもや兄妹児と一緒にゲームや物づくりをして過ごしています。また、地域の施設の主催する行事や募金活動などにも参加し、広くボランティア活動を行っています。学内での活動は、毎週木曜日の放課後に教室を借りて例会や行事の話し合い・準備を行っています。部員は社会福祉学科に限らず人間形成学科、公共社会学科と様々な学科から集まっているため、多角的な視点から活動の内容を深めていくことができます。つくしんぼの活動の中心である子どもたちを招待しての例会には、その季節に合ったイベントなどをベースにして組立てていくことが多いです。たとえば昨年は豆まきや、水鉄砲、クリスマス会などを企画しました。また、その他にも、外で身体を動かしたり、おやつを作って食べたり、工作をしたりなど、子どもたちにも保護者にも学生自身も楽しめるように工夫を凝らして計画を立てています。

また、例会以外の地域の活動にも精力的に参

加をさせていただいています。特に田川市の社会福祉協議会と一緒に活動をさせてもらうことが多く、昨年も6月に行われたフレンドシップツアーという100人規模で行われる、下関への日帰り旅行をはじめ、募金活動・福祉まつりなどにも参加しました。また、毎年8月に行われる「つくしんぼキャンプ」は、つくしんぼがかなり力を入れている行事でもあります。「つくしんぼキャンプ」とは、学生が主体となり障がいのある子どもたちや、地域の子どもたちを招待し、一緒に活動する2泊3日のレクリエーションキャンプです。学生たちは夏休みを利用して、キャンプで行うレクリエーションや劇の準備をしたり、キャンプ全体の流れを確認したりします。キャンプのあとには毎年泣いてしまう人がいるほど達成感があります。他にも9月、10月には地域の施設などが主催するお祭りに、ボランティアとして参加します。主にお祭りの準備や出店、運営の手伝い、施設の利用者さんと一緒にお祭りを楽しむといったことをしています。

部員名

伊藤 彩、緒方詩織、小野薫子、藤澤幸恵、永井友幸、平田慎一郎、蛭原真琴、大村和輝、下尾宏美、大本梓織、林 里奈、松尾和将、門脇和宏、河津 雅、古村千愛、下川園美、玉野宏幸、續木奈美、浜田悠乃、尾上彩友美、栗岡 愛、阿部 望、河崎麻希、田中七津美、結田希望、谷本大幸、西 淳也、品矢紀代子、他1名



つくしんぼとは？

- 対象
障がい児とその兄弟
- 目的
保護者や子どもたちに安心して楽しんでもらえるような企画を立て、交流すること
- 部員数
公共社会学科 2名 人間形成学科 11名
社会福祉学科 16名 計 29名

3

つくしんぼの年間計画

- 4月 あすなる運動会
- 5月 新歓 例会
- 6月 フレンドシップツアー
- 7月 例会
- 8月 キャンプ
- 9月 つくし市
- 10月 福祉まつり
- 11月 学祭
- 12月 例会(クリスマス会)
- 1月 引き継ぎ
- 2月 例会

毎週木曜日:定例会

4

定例会

- 子どもたちが楽しめる遊び
- ゲームの道具作り
- 障がいや身体能力等の情報を事前に把握
- 情報を学生同士で共有
- 危険予測する

会議中

5

例会

子どもたちを招待し一緒に遊びます。

- みんなで子どもの体調など細かな変化に気づく
- みんなで安心して楽しく活動できるようにする
- 保護者の方とのコミュニケーション

6

あすなろ運動会

障がいのある人もない人も一緒に汗を流します。
老若男女誰もが楽しく運動できます。



7

フレンドシップツアー

フレンドシップツアーとは、障がいがあることにより外出することが困難な方々とボランティアによる日帰り列車の旅のことです。

駅の階段や道路の通行の練習を学内で指導を受けながら練習しました。



8

フレンドシップツアー ～門司港レトロへの旅～

気づいたこと

- ・車椅子での移動の困難さ
- ・様々な制度を身を持って体験



9

つくしんぼキャンプ



社会福祉協議会が主催する、小学生から高校生までの一般の子どもや障がい児たちを対象とした二泊三日のキャンプです。
学生が夏休みに集まり、二週間以上かけてキャンプの準備をします。

- ・例会での知識や経験を活かす
- ・周りの状況を把握する
- ・自らの役割を果たす



10

キャンプを通じて感じたこと

- ・限られた時間、人数の中で子どもたちを乐ませられるものを作ることの大変さ
- ・自分に出来ることを理解する
- ・担当の子ども、班だけではなく全体に見るために広い視野を持つ



11

まとめ

- 障がいやそれらを取り巻く環境と向き合うことの意味を知る
- 子どもたち、仲間との信頼関係を築く
- 多角的な見方を身につける

12

今後の課題

- サークル内・外での報告、連絡、相談の徹底をする
- 子どもたちや仲間との信頼関係の構築する
- 障がいに関する知識、理解を話し合いや体験を通して深める

13

ご清聴ありがとうございました。



14

活動報告 5. ボランティアサークル活動報告

(3) TICADV学生プロジェクト

発表者 矢部 航(公共社会学科3年)

原田和弥(公共社会学科2年)

活動分野：国際貢献

部員数:8名



TICADV学生プロジェクトは、国際的な政策対話の場であるアフリカ開発会議にユースの声を届けたいとの思いから立ち上げられた全国規模のプロジェクトです。

目的は、TICADVおよびアフリカに対する日本の学生の意識向上、日本とアフリカのユースリーダーのネットワーク構築、TICADV本会議でのアフリカと日本のユースの声を社会に届けることの3つを掲げています。

TICADV学生プロジェクトの説明会を開催し、このことからアフリカや国際協力に興味のある学生主体の「Ch-Link」のサークルが誕生しました。

TICAD は、アフリカの各国政府を日本に招致して開催される会議で、その5回目の会議が6月に開かれます。この会議に、学生が参画します。こうした政府レベルの議論に学生が参画する意味とは、第一に、TICAD で議論されることが「将来」の内容であるということです。その「将来」を担っていくのは他でもなく私たち若者であるため、そこに私たちの考えを伝えることには意義があるのです。第二に、アフリカ全体の人口のうち、65%が35歳以下の若者であるということが挙げられます。TICAD の議論の内容も「雇用」「教育」といった若者との関連の強いものが多いのですが、現状として実際の若者の声がまとめられ、発信される機会は少なかったのです。そうした意識から発足したのがTICADV学生プロジェクトです。私たちは日本とアフリカの学生で「アフリカと日本のこれから」について話し合い、意見をまとめ、社会に発信することを目指しています。

普段の活動としては、毎週月・金曜日の昼の時間を使って、学生中心の勉強会を実施しています。各自で資料を持ち寄り、それらについて議論をすることでアフリカに対する理解を深め

ることを目指しています。自主勉強会で扱われるテーマは、「飢餓について知る」「TICAD について知ろう」という根本的な話題から始まりましたが、議論が進んでいくなかで「幼児教育の国際比較」というような福祉・保育に力を注ぐ、県立大学ならではの議論もみられるようになりました。今後の活動としては、メイン企画である「日本アフリカユースサミット」に向けて、九州地方内における九州地方説明会・相談会の実施等、広報活動や応募者への対応に力を入れていきたいと思っています。

私たちがこの活動を通じて得られたことは、第一に同じ意識を持つ人々と関わりを持つことができたということ。第二に学生と世界の関わりについて考えるきっかけになったということ。第三に各学科固有の視点で幅広い議論を行うことが可能になったということです。

TICADV学生プロジェクトは全国規模で進められています。他の大学、他の地方の学生との繋がりはこの活動に参加したからこそ得られたものです。他の大学の学生に比べ私たちは「国際協力」という活動に関して経験が浅いのが現状です。しかし、私たちが県立大学で学んでいることと「国際協力」との関係は断絶したものではありません。

私たちだからこそできる活動がある。そう信じて、今後も前向きに取り組んでいきたいと思っています。

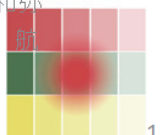
*TICAD とは、Tokyo International Conference on African Development (アフリカ開発会議)の略称です。

部員名

矢部 航、原田和弥、東淵和也、人見優介、
亀井琴絵、松本美和子、上藤沙希、郡山智絵

TICAD V 学生プロジェクト 活動報告

公共社会学科2年 原田和弥
公共社会学科3年 矢部 新



1

2013/1/29

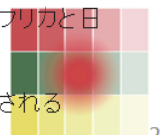
平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

TICAD とは

(Tokyo International Conference
on African Development) の略称

- ・アフリカ各国政府を日本に招致して開催される“アフリカ開発会議”
 - － 場所:東京
- ・アフリカの開発問題や将来のアフリカと日本の関係について協議する場
- ・“第5回目”が2013年6月に開催される



2

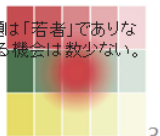
2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

TICADに学生が参画する意味

- ① TICADでは将来のアフリカと日本の関係について話し合われる。
その対話の場実際に将来を担う若者が考えを伝える場があるべきである。
- ② アフリカ全体の人口のうち、65%が35歳以下の若者である。
「雇用」「教育」など多くの分野で中心的話題は「若者」でありながら実際の若者の声がまとめられ、発信される機会は数少ない。



3

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

TICAD V 学生プロジェクトとは

- ・日本とアフリカの学生が「アフリカと日本のこれから」について話しあい、意見をまとめ、社会に発信するプロジェクトです。
- ・2013年3月横浜にて開催する「日本アフリカユースサミット」ではアフリカン50名・日本人50名が集まり、11日間の地方研修・分科会を行い、社会・TICAD本会合へ私たちユースの声を届けます。



4

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

TICAD V 学生プロジェクトの目的

1. TICAD・アフリカに対する意識向上
2. アフリカと日本のユースのネットワーク構築
3. アフリカと日本のユースの声を社会に届ける



5

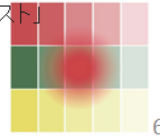
2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

主な企画

1. 2013年3月「日本アフリカユースサミット」
2. 「アフリカリサーチキャンプ」
11月西部・2月南部・3月東部アフリカへの渡航
3. 2013年2月9日「スピーチコンテスト」
在日アフリカン学生の声を発信する



6

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

共催・協賛

- 共催機関
 - 独立行政法人 国際協力機構(JICA)
 - 一般社団法人 日本学生会議所(UNISC)
- 協賛機関
 - NGO 特定非営利活動法人日本リザルツ

TICAD V 学生プロジェクト キックオフイベント
2012.11.07
JICA研究所 国際会議場(東京都新宿区)にて



2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

7

運営体制

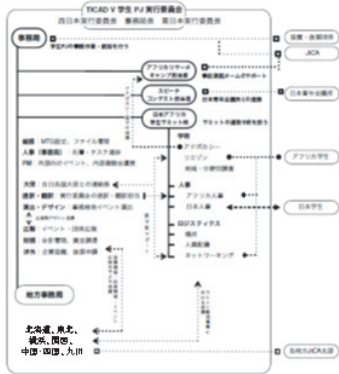
- 全国の7事務局で運営
 - 本部事務局(首都圏) + 地域別事務局6ヶ所
 - 北海道、東北、横浜、関西、中国・四国、九州
- 合計64名の学生が参加(2013/01/28現在)
 - 同志社大学、早稲田大学、中央大学、青山学院大学、国際教養大学、東京大学、横浜市立大学、大阪大学、広島大学、下関市立大学...等
 - 全国各地の大学から参加している。

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

8



2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

9

全国での連携方法

- インターネットの活用
 - Facebook
 - コミュニケーション、情報共有
 - Skype
 - チャットや通話によるリアルタイムのコミュニケーション
 - Dropbox
 - 企画書や議事録、広報資料等のファイルを共有
 - Google Drive
 - 名簿や進捗表等、多数のメンバーが頻りに編集するファイルを共有

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

10



Facebook上の議論の様子

プロジェクトの運営に関するページの他、「経済発展」「社会貢献」「平和と実花」などのテーマの下で議論するページが設けられている。Facebook上の議論にはアフリカ語出身の学生も積極的に参加している。

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

11

ここまでの活動(福岡県立大学)

- 2012.10.19 TICAD V 学生プロジェクト説明会
 - 福岡県立大学 社会貢献・ボランティア支援センターにて
 - 17名の学生が出席
- 2012.12.08 西部アフリカ渡航報告会
 - JICA九州にて
 - 西部アフリカ渡航に参加したメンバー3名が現地で体験したことについて報告
- 2012.11.21~ 自主勉強会
 - 毎週月・金曜日の昼(12:00~12:50)の時間を使って、学生中心の勉強会を実施。各自で資料を持ち寄り、それらについて議論することでアフリカに対する理解を深めることを目指す。

2013/1/29

平成24年度社会貢献フォーラム

TICAD V STUDENT PROJECT

12

自主勉強会

- ・第一回目のテーマ：“飢餓について知る”
 - － 飢餓とは何か、ソマリアを例に挙げて
- ・第二回目のテーマ：“TICADについて知ろう”
 - － TICAD誕生の経緯、TICADとは、近年の行き詰まり
- ・第三回目のテーマ：“幼児教育の国際比較”
 - － 幼児教育の現場、幼児期の教育の影響、発展途上国の幼児教育



2013/1/29

平成24年度社会貢献フェロラム

TICAD V STUDENT PROJECT

13

ここまでの活動(福岡県立大学)



10/19 福岡県立大学での説明会

12/8 西部アフリカ渡航報告会

2013/1/29

平成24年度社会貢献フェロラム

14

今後の活動

- ・日本アフリカユースサミットに向けて
 - － 参加者募集および選考
 - ・ 募集期間：2012年1月12日～2月15日
 - ・ 対象：日本人の学生、アフリカ人留学生
 - ・ WEBページ：<http://ticad5stu.com/>
 - － 九州地方の各団体への広報
 - － 九州地方説明会・相談会の実施
 - ・ 地方からの参加を促す
 - ・ 参加希望者とFace to Faceのコミュニケーションを取ることで、書類やインターネット上のやり取りだけでは満たせない部分を補っていく



2013/1/29

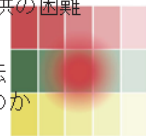
平成24年度社会貢献フェロラム

TICAD V STUDENT PROJECT

15

今後の改善点

- ・facebook や skype を使った連絡手段
 - － 情報量の増加による情報共有の難化
- ・他大学、及びNGO団体との連携
 - － 情報共有の難化による情報提供の困難
- ・社会問題へのアプローチの方法
 - － どの社会問題に焦点をあてるのか



2013/1/29

平成24年度社会貢献フェロラム

TICAD V STUDENT PROJECT

16

まとめ

- ・同じ意識を持つ人々と関わりを持つことができた
- ・学生と世界の関わり方について考えるきっかけになった
- ・各学科固有の視点で幅広い議論を行うことが可能になった



2013/1/29

平成24年度社会貢献フェロラム

TICAD V STUDENT PROJECT

17

TICAD V 学生プロジェクト 九州事務局

福岡県立大学

- ・ 公共社会学科3年 矢部 航
- ・ 社会福祉学科3年 東淵 和也
- ・ 公共社会学科2年 原田 和弥
- ・ 公共社会学科2年 人見 優介
- ・ 社会福祉学科1年 亀井 琴絵

私たちにとっては知識、経験、人脈などの土台のほとんど無い状態からのスタートとなりますが、「まずは自分たちができることから」という心構えで前向きに取り組んでいきたいと思ひます。

2013/1/29

平成24年度社会貢献フェロラム

18